

「蕃人」・ジェンダー・セクシュアリティ ——真杉静枝と中村地平による植民地台湾表象からの一考察——

李 文茹

はじめに

第1節 植民地台湾を書くこと——1939年の台湾旅行まで

第2節 「蕃女」への眼差しとジェンダー

第3節 歴史事件の物語で語られる「蕃人」

第4節 植民地台湾表象とジェンダー

おわりに

(要約)

植民地台湾を描く作家の多くは男性だったため、男性作家の作品の特徴は植民地台湾の表象の全体を代表するものとして考えられがちである。したがってジェンダーの観点から植民地台湾の表象を論じることは非常に重要である。本稿では真杉静枝と中村地平による台湾「蕃人」*の表象の差異に注目し、それを植民地台湾の表象と帝国作家のジェンダーの問題を考える際の事例研究として取り上げたい。この二人の台湾経験は重なる部分が多いものの、ジェンダーの視点で見たときに非常に対照的であり、ジェンダーの問題を考えるにあたって格好の材料となると考えたからである。

地平はセクシュアルな対象として「蕃女」を表象するのに対し、真杉は社会的に抑圧される女性としての主体に感情移入し「蕃女」を表象することである。真杉と地平の歴史的事件も含めた「蕃人」の表象を分析することによって分かったのは、二人の表象の差異は、作家がおかれた社会のジェンダー秩序と関係していることである。本稿では、帝国的なまなざしとジェンダーとの関係を明らかにする一方、帝国女性作家が植民地を表象する際の屈折した心理的構造をも浮き彫りにした。

はじめに

植民地台湾の表象は作家の性別によってその手法が異なっているものの、植民地台湾表象に関する先行研究では作家の性差が問題視されてこなかった¹。日本人作家の多くは男性である。それゆえ、台湾と縁のある作家の多くも男性である。したがって植民地文学の言説は男性作家が中心となり、女性作家による経験・表象は看過されがちであった。また女性作家に関する研究があるとはいえ、ジェンダーと植民地表象との問題に関する分析はほとんど見られない²。

性差によって植民地台湾の表象の仕方は異なる。例えば1930年代までの作品を例に挙げると、佐藤春夫の「女誠扇綺譚」(『女性』、1925.5)に代表されるように、男性作家は異国趣味や南方憧憬に溢れる作品を多く発表した。それとは対照的に、真杉静枝は植民地に生きる不幸な女性をしばしばテーマにした。例えば「駅長の若き妻」(『大調和』、1927.7)がそれにあたる。そこで本稿では、今まで注目されてこなかった日本人作家の性差と植民地台湾の表象との関係に注目し、ジェンダーの観点から植民地台湾文学を考え直すことを目的とする。具体例として台湾在住経験を持つ真杉静枝(1901.10~1955.6)と中村地平(1908.2~1963.2)を取り上げる。この二人の

* 「蕃人」、「蕃婦」、「蕃界」などは現在、差別用語となる。本研究では、資料の歴史性を考慮しつつ、これらの言葉をそのまま使用する。なお、その際、「」付けで記す。

台湾経験は重なる部分が多いものの、ジェンダーの視点で見ると、非常に対照的であり、ジェンダーの問題を考えるにあたって格好の材料になると考えたからである。

1939年2月末、真杉は台湾在住の家族に面会するために日本を発ち³、他方、地平は小説の取材を目的として真杉と台湾に同行した。帰国後、二人とも台湾に関する作品を多く発表し、とりわけ「蕃人」の題材を扱った作品が興味深い。本稿では真杉と地平による「蕃人」の表象の差異に注目し、それを植民地台湾の表象と帝国作家のジェンダーの問題を考える際のケーススタディとして取り上げる。

第1節 植民地台湾を書くこと——1939年の台湾旅行まで

この節では、1939年までに発表された真杉静枝と中村地平の台湾作品について分析する。真杉の初期の台湾作品では、「異郷の墓」という作品の表題が示すように、植民地に在住する帝国女性の不幸が描かれている。一方、地平は南国憧憬を抱える帝国男性の植民地体験を描いた。

1. 「異郷の墓」としての植民地体験

林真理子は真杉をモデルに『女文士』(新潮社、1998)を書いた。『女文士』というタイトルからも分かるように、真杉に関する言述は、スキャンダルの扱われることが多い⁴。近年、植民地台湾文学や戦時下女性文学が多く復刻されているなか、真杉の作品にもふたたびスポットライトが当たっている。

1902年、福井県で私生児として生まれ、3歳で家族と共に台湾へ渡った真杉は、看護婦養成学校を卒業したのち、台中病院で看護婦を務め、17歳で親に半ば強制的に台中駅の助役・藤井熊左衛門と結婚させられた。その後夫に伴い旧城(現高雄市佐営)に移転したが、夫の暴力に耐え切れず、結婚してから4年目の1921年に日本へ出奔した。真杉がふたたび台湾の土地に足を踏み入れたのは1939年、地平に同行するときだった⁵。

1939年までに真杉は台湾を舞台に不幸な日本人女性を描き続けた。前述したデビュー作「駅長の若き妻」をはじめ、「異郷の墓」⁶、「南方の墓」⁷、「南海記憶」⁸などの作品では、植民地台湾は帝国女性を不幸にする場所であり、象徴的な意味での「異郷の墓」である。作品「異郷の墓」では、夫の暴力に耐え切れず、服毒自殺した医者妻が描かれ、それと同じようなエピソードが織り込まれる「南方の墓」でも女性の不幸が淡々と描写されている。

舍宅の奥さん達は、嫉妬を妬くと、夫に殴られる。(略)余程、馬鹿で無い限り夫に殴られる。碁を打つてゐる夫を、食事に呼びに行つて殴られ、口答へをしたと云つて殴られ、婦人雑誌を読む奥さんは、大かた男にきらわれる。

『嬢の奴、ぶんなぐつてやつた。』と云へば、その夫は男仲間で、あがめられる。何処迄行つても、女は、女婢でしかあり得ない。

「こんな馬鹿な習慣は、屹度、植民地だから、残つてゐるのだ。文化の明るい内地だつた

ら、男だつて、屹度、女を殴つた位で、威張つていられないにちがひ無い。」

(「南方の墓」、下線は引用者による。以下同じ。) ⁹

駅長の娘を主人公に設定する「南方の墓」では、植民地における家父長制と夫からの暴力に抑圧される日本人女性が描かれている。旅役者とともに台湾に渡り、芸者屋に売られた女性は、医者によって落籍され結婚したものの、夫の暴力に耐え切れなくなり汽車に乗って逃げようとした翌日、亜ヒ酸を飲んで死んでしまう。「枯れ草の根を掘みしめ乍ら、旧城の雑草の中で、亜ヒ酸を飲んで悶死」¹⁰した医者夫人の悲惨な最期は家父長制への強烈な抵抗であろう。物語の最後に駅長の娘は家族に手紙だけを残し、女性を不幸にする植民地を後にして東京へ向かう。

この7年後に発表された「南海の記憶」にも「南方の墓」の面影が窺える。「南海の記憶」は、「私」が10年前に遡り回想した、台湾に駆け落ちした内地の貴婦人とその恋人の画家との惨めな様子を描いた作品である。当時、植民地官吏の家庭しか知らない「私」は、夫が妻を殴るのが常識だと思っていたが、日本から来た婦人とその恋人との仲を見て驚いた。しかし、「私」が羨望するその美しい内地婦人は、一年が経ったあと、「無造作に後ろで束ねた髪毛は、すっかり色あせてみだし、化粧を忘れた頬は、台湾のどこかでもみかける、あの土色に近く、カサカサ」になり、その恋人は「絵筆も捨てはてゝ、鉄道の運送会社に雇はれ、僅かなその収入が、酒と女に消へてゐる様子」になってしまう¹¹。象徴的な意味であるが、「南方の墓」の台湾にはもう一人日本人女性が葬られてしまう。

夫に暴力を振るわれる女性や凋落した貴婦人などからも窺えるように、真杉の初期の作品は、植民地で悲惨な体験に遭った帝国女性を多く描いている。作品「異郷の墓」の最後に、語り手は医者夫人の葬式に参列する日本人たちの気持ちをこのように述べている。「途中、押黙つた皆の心を貫いたものは、内地の故郷へ急ぎ度い気持ちだつた。『こんな所で、死にたくないなあ——』誰れかが云つた。「こんな所で、死にたくない」という叫びのなかの「こんな所」とは植民地台湾である。これを、「南方の墓」で描かれた「こんな馬鹿な習慣(男性の暴力)は、屹度、植民地だから、残つてゐる」という話と関連付ければ、植民地台湾とは、女性の不幸を象徴する場所であったことが窺える。このように1939年以前の真杉の作品において、植民地台湾は帝国女性にとっての「異郷の墓」、「南方の墓」なのだということが繰り返し強調された。

「異郷の墓」から脱出しようとする女性の心境とは対照的に、「神経衰弱」などの精神的な病気や苦悩から、日本人男性は植民地台湾に癒しを求めようとする。真杉による「異郷の墓」としての台湾表象は、日本人男性作家の作品にはあまり見られない特徴である。

2. 「熱帯柳の種子」にみるセクシュアリティへの関心

太宰治、小山祐司と並び井伏鱒二門下の三羽鳥と呼ばれていた中村地平は、佐藤春夫の影響で宮崎中学校卒業後、1926年18歳で台湾総督府台北高等学校に入学した¹²。地平の文学への関心はそれ以前から芽生えており、高等学校に入ってから積極的に文芸サークルで作品を発表した¹³。1930年に東京帝国大学文学部美術史科に入学した地平は、その後も精力的に創作活動を行い、

「熱帯柳の種子」¹⁴で佐藤春夫に認められて以来、「廃港淡水」¹⁵、「南海の記」¹⁶、「旅さきにて」¹⁷など、台湾を題材に多くの作品を発表した¹⁸。高等学校を卒業してから、地平がふたたび台湾を訪れたのは1939年の真杉との旅行であった。

先行研究では、地平の台湾作品は作家にとっての「癒しとしての南方文学」だと評され、「南方憧憬」、「台湾への強い郷愁」、「エキゾチックな印象主義」などとして位置づけられている。『中村地平全集』¹⁹を編集した浅見淵は、近代人的自意識の苦悩が極端に達したとき、「原始時代の野生に溢れた素朴な単純を一種の救いとして強く憧れるように」なり、それが「作者に台湾への郷愁を掻き立てる」と述べている²⁰。いわば地平の台湾作品は「原始時代の野生に溢れる素朴な単純」な場所に癒しを求めたあとの所産とされている。また河原功の地平論²¹や、蜂矢宣朗の『南方憧憬——佐藤春夫と中村地平』²²、岡林稔の『《南方文学》その光と影』²³などの先行研究においても、地平の南方憧憬が指摘されている²⁴。だが、「癒しとしての南方文学」の言説は作家のジェンダーの問題にかかわっていることが、従来看過されている。

地平の最初の台湾小説「熱帯柳の種子」は、「私」が回想した台北高等学校頃の下宿体験を描いている。

裏の土人街では、淫売といふハイカラ言葉が流行した。夜、古賀の部屋からみてみると、橋の付近には土人娘のうつむひて歩く輪郭が黒く見える。輪郭は間もなく二つになり、それは一つにもつれて、川沿ひの煉瓦屋へはひる。窓の灯がきえて川面ばかり蒼く光る——それは毎晩のことだ。(略) 下宿の主人は、日月潭へ土木出張にでたまま音信をよこさない。細君は蕭蕭とした後姿をパパイヤの樹にもたせ、手をうつて鯉をよぶのであつた。(略) 下宿の細君のところへ髪結ひは毎朝やつてきたが、主人は帰つてこず、細君は蕭蕭とした後姿をパパイヤの木にもたせるのであつた。(略) 主人の消息は未だに不明だ。孤独の生活にたへられないのであらう。この頃、真夜中の廊下を、足音のある細君の影が幾度となく僕の部屋の前にゆききする。月末には、それでこの家をでるつもりだ。

(「熱帯柳の種子」²⁵)

「私」が記憶する植民地の風景には、豚の群れと遊ぶ台湾人少女・アチャと、深夜「私」の部屋の前に訪れる「孤独の生活」に耐えられない細君の足音と、売買春がある。岡林稔は台湾人少女の純真さと日本人妻の性的な誘惑、売買春の光景を対照的な構図として捉え、以下のように論述している。「植民地ゆえに行われる性的欲望の野放図な実態は、地平が純粹に憧れた樂園を汚す悪夢の一つで」あり、「地平はアチャの清純さや高貴さを中心とする作為的な人物の描出に、極めて間接的な植民地批判」を折り込んでいる²⁶。また作品の最初の部分に書かれる「植民地にすむ私達の心は、ともすれば虚無的になる」²⁷という心境について、岡林は、「「虚無的」となる背景には、(略) 地平自身の性に対する潔癖感と、そこから植民地の性の淫蕩さに対する嫌悪感があつた」²⁸と解釈している。

最初の作品集『熱帯柳の種子』の「後記」に、地平は「女性に対する男性の悪徳を憎」み、「男性の貞操も亦美しいものであること」を信じたい意図で「螢」、「きつつき」、「花子」などの初期作品を書いたと語っている²⁹。「地平自身の性に対する潔癖感」という岡林の解釈は、この「後記」をもとにしたものだと考えられる。「アチャの清純さや高貴さ」を、「純粹に憧れた樂園」を象徴するようなものと捉え、それを汚すのは「性的欲望の野放図な実態」だという氏の解釈からも推測できるように、植民地を表象する際に地平が示したセクシュアリティへの関心は、すでに初期から芽生えていた。だが、『熱帯柳の種子』の「後記」で列挙された、性をめぐる道徳観や価値観に関連する作品群のなかに、作者にとって「年長的に処女作にちかい」（岡林）意味がある「熱帯柳の種子」は挙げられていない。そこで、「熱帯柳の種子」における「性に対する潔癖感」は果たして「間接的な植民地批判」につながるかどうかは、まだ議論の余地があると思われる。いずれにせよ地平による「癒しとしての南方文学」に、セクシュアリティへのただならぬ関心があったことは否定できないのである。二度目の台湾旅行以降、地平の台湾表象にはセクシュアリティへの関心がいっそう濃く表現されるようになる。

第2節 「蕃女」への眼差しとジェンダー

1939年2月の台湾旅行から帰国後、真杉も地平も「蕃人」を題材に作品を発表した。二人とも「蕃女」を被観察体として描写したが、ジェンダーの観点から読めば、その着眼点や表象の仕方などから異なる意図が窺える。

真杉は「蕃人」を題材に「台湾の女性達」³⁰、「征台戦と蕃女オタイ」³¹、「蕃女リオン」³²などを発表した。「台湾の女性達」は、真杉が台北、台中、台南、安平、阿里山を旅行するときに出会った本島人（台湾人女性）、「蕃女」及び台湾在住の内地人（日本人）を含めた女性についての随筆である。1939年、台湾では皇民化運動が盛んになり、日本語常用運動が推進されていた。真杉は訛りのない日本語を口にする綺麗な本島人女性について、「内地人少女と見分けのつかない美しい本島人の娘を沢山みかけた」とい書く一方、阿里山の登山列車の車窓からみた洗濯中の「蕃女」も描いている。

駅の前に背の高い、髪を内地の若い婦人がするやうに、無造作に後ろに束ねた婦人がはでなゆかたを着て、背に赤児を負って立つてゐる。その婦人がふとこちらをみた時、私は思はず声をあげさうだった。鼻の高い面長な顔に、くつきりときつい眉と、美しく幾分けはしい大きな眼をもった、大変典雅とも云ひたいほどな美人なのである。(略) 列車の窓々から、いつせいに自分に向けて眼が集まつてゐる、といふことを意識してゐても、その蕃婦はそれを、大へん素直な受け方で、まるで生れ落ちた時から馴らされてでもゐるほどな無関心さで受けてゐる。

(「台湾の女性達」³³)

阿里山登山鉄道が十字路駅に停車するとき、「私」は不意に出会った「蕃女」の美しさに驚きを覚える。この派手な浴衣を身にまとう「大変典雅」な「蕃女」は、駐在所の内地人巡査の妻である。美貌の「蕃女」が内地人巡査の妻だという設定は、阿里山を旅行したときの真杉の体験に一致しているかもしれないが、のちの作品で言及される「蕃女」に関する恋愛や結婚の問題とあわせて考えると、この設定は偶然ではないように思われる。

「蕃女」と内地人との恋愛や結婚問題を扱う作品には「蕃女リオン」がある。神経衰弱の発作で自殺を計った梶原は、谷中でリオンに発見され命を取り留めた。梶原と出会ってからリオンは「春に目醒めている少女」のようになり、梶原は「野性的なおいのむんむん」とするリオンに感動し山へ通いはじめる。だが、「例の霧社事件以来、「蕃女」と内地人男性との事情には、非常な自粛が要求され」³⁴、梶原は山に駐在する巡査からリオンとの関係を慎むようにと警告を受けた後、リオンと二人で行方不明になってしまう。数日後、一人で帰ってきたリオンによると、自分を心中に誘いそこなった梶原は、他人に発見されない場所で死ぬと言い残し山奥に入った。村に戻ったリオンは間もなく混血児「愛子」を出産する。

「台湾の女性達」では日本人巡査と結婚した「蕃女」が登場し、「蕃女リオン」では日本人の私生児を出産する「蕃女」が登場する。両作とも「理蕃政策」の一環だった婚姻政策を作中に取り込んでいる。当時、「蕃地」を統治するため、台湾総督府は理蕃警察官に先住民部落の頭目の娘と結婚することを奨励した。

「蕃女」と日本人男性との問題について、霧社事件の先住民体験者・アウイ・ヘッパハは以下のように語っている。「我々にとって最も耐えがたいことは、日本人巡査が権力をたてに、我々部落の女を性のはげ口に利用したことだった。強姦と私生児の誕生という問題は、かつて我々の社会にはなかったことである。また日本人巡査と結婚した女たちも、夫婦共に白髪がはえるまでという幸福な生活を送った者はほとんどいなかった。大部分は母も子も共に山地に捨て置かれてしまった。それは贖の結婚であり、同棲関係にすぎなく、全く利用のためだけであった。」³⁵例外もあったものの、理蕃目的の政策的な結婚によって結局、「山地のきれいな女たちは、次々と理蕃政策の犠牲」(アウイ・ヘッパハ) になっており、ほかにも帝国男性による「蕃女」のレイプの問題があった。

「蕃女リオン」における私生児のエピソードは、上記のような現状と無関係ではなかろう。リオンと梶原との関係について、作中では簡単な記述しかなく、例えばリオンはいつも木の上から梶原を眺めたり、梶原は山へ行く度にリオンに服や髪飾りを贈ったりするようなことしか書かれていない。作品の最後に「今、愛子は六つぐらゐになるはずだ」と、唐突な終わり方で物語が閉じられる。「蕃女リオン」は「蕃地」における日本人男性と「蕃女」との問題を取り上げるとはいえ、「今、愛子は六つぐらゐになるはずだ」という記述によってしか私生児の問題が表現されないように、さらなる深刻な現実問題や帝国男性の責任などが不問に付されている。

真杉は「蕃女」を被観察体として描写する一方、不十分とはいえ、日本人男性との私生児問題にも言及した。同じく見られる対象として「蕃女」を表象する地平は、登場人物の嗅覚、触覚などの感覚描写を通して、「蕃女」の身体から獲得した感動を繰り返し語っていた。

真杉と同伴した1939年の台湾旅行では、地平は様々な優遇を受けながら、「台北を始めとして板橋、台中、彰化、鹿港、日月潭、霧社、台南、安平、高雄、屏東、サンテイモン社、恒春、四重溪、ガランピ、高士佛社、知本温泉、台東、吉野村、花蓮港、タロコなどの町や、名所などを見て歩いた」。³⁶台北滞在中に、地平は台北帝国大学の土俗学教室に何度も足を運び、後に長編小説『長耳国漂流記』³⁷と「太陽征伐」³⁸などの「蕃人」神話を書き上げた。そのほかに旅行体験を綴った随筆、「蕃界の温泉」³⁹、「蕃界の女」⁴⁰、「蕃人の娘」⁴¹などがある⁴²。

「蕃界の温泉」は、知本温泉へ旅行する「僕」が不意に入浴中の「蕃女」を見かけたときの、「息がつまるほどの感動」を綴った作品である。それと似たようなモチーフが織り込まれる「蕃界の女」では、小説家・三吉と、絵師・山名が「蕃地」で体験した「蕃人」との交流が描かれている。三吉は東京で、「慢性の不眠症」に罹り精神状態が不安定な女性と、「不都合な結婚生活」を営んでおり、「不幸な気持ちをいくらかでも癒したい希み」で台湾を訪れる⁴³。このような三吉だが、ある日、山の中を散策するとき、旅行中で知り合った山名と偶然、入浴中の「蕃女」と出会う。

大きい岩石の蔭に蕃人の女が二人湯浴みしてゐるのが見受けられた。一人は体の黒光りする老婆で、他の一人は、彼女の孫でもあらうか、まだ若い娘であつた。娘は両腕を組んで枕にし、放心したやうに平べつたい岩の上に仰むけに寝そべつてゐる。大きい豊かな乳房を二つ、紫陽花いろに澄みわたつた空にむけてぽつかりと、湯づらに浮かべてゐるのである。

（「蕃界の女」⁴⁴）

三吉はこの光景を「感動にあふれる思ひで」、「まじろもせずにながめつづけ」、また彼のそばにいる山名も、「宇宙的な眺めですね。出来すぎてゐるので絵にもならない」と呟く。山間の樹林から、入浴中の「蕃女」の乳房・身体を窺視した山名も三吉も衝撃的な感動を覚えるのである。

視覚にとどまらず、日本人男性と「蕃女」の身体的な触れ合いも描写されている。以下の引用はタウタウ社で「蕃女」シバル・イワルと接触するときの三吉の心境である。

三吉は起ちあがつて、（シバル・イワルの）帯の片端をにぎつてやつた。汗の匂ひと、土の匂ひとがまざつたやうな女の体臭が、ふんと鼻をつく。体をイワルがくるりとまわした瞬間、柔らかい、暖かい乳房がふつと三吉の指さきに触れた。イワルは帯のホツクをかけることに四苦八苦してゐて、そのまま、体を動かそうともしない。三吉の胸にはなにか熱いものがあふれ、体が震えるやうな気持ちだつた。衰えきつてゐる体に、自然の生命力が吹きこまれるやうな気がした。（略）シバル・イワルは三吉のすぐ傍らに体をくつつけるやうにして、腹這ひになり、床の上に上半身をたおしてゐた。女の体のぬくもりが腰の辺りに暖かく伝つてきて、山名の気持ちは普通でなかつた。

（「蕃界の女」⁴⁵）

上の引用は、イワルが自らの腰にうまく締められない帯の端を三吉に握ってもらう場面である。肌で感じられる距離で「蕃女」の身体に触れる描写は、遠距離から入浴中の蕃女を窺視するのと異なり、三吉は汗の匂いと柔らかく暖かい乳房を感じ取りながら、「自然の生命力が吹き込まれる」ように「蕃女」を感じる。「その夜、三吉は布団のなかに入つて、イワルの暖かい体温のことが忘れられなかつた。また睡りに落ちてからも夢にイワルの姿が浮んできた。夢のなかのイワルはいつか知本温泉の天然風呂で眺めた乳房の豊かな蕃婦といつしょになつてみた」⁴⁶と。このように夢のなかでもイワルの感覚をなぞり、布団の中でイワルの体温と窺視した「蕃女」の乳房を連想し思い出す三吉の体験は、セクシュアルな体験でもある。このような「蕃女」の身体に対するセクシュアルな想像は、「蕃女」を「熟れている果実」と比喻する「蕃人の娘」にも見られる⁴⁷。

先述したように、真杉も地平も「蕃女」に心理描写を付与せずに単なる被観察体として描き、このような「見る」／「見られる」という構造が示す非対称的な関係は、宗主国と従属国のあいだの権力構造を具象化するものだと考えられる。一方、同じく「蕃女」の美（セクシュアリティ）を享受する二人の描写をさらに細分化する必要がある。真杉は「蕃女」の顔を賞賛することにとどまるのに対し、地平は入浴中の「蕃女」の裸体を窺視することから獲得した感動や、擬似性愛的な体験を繰り返し強調している。すなわち、前者に対して後者の場合は女性のセクシュアリティを性愛的な対象として享受する行為であり、そのなかには視覚的な衝撃から獲得する性的快樂が濃厚に漂っている。見るという行為と性差について、映画研究者・ローラ・マルヴィは以下のように論じている。「性的な不均衡に規制された世界においては、見るという行為の快樂は能動的＝男性、受動的＝女性に分割されている。（略）女性の外観は、「見られるため」（to be-looked-at-ness）ということを暗示するように、視覚的で性愛的な強度の衝撃をもつような形に規則化されている。性的対象として呈示された女性は性愛的見世物のライトモチーフ的存在だ。」⁴⁸

同じく被観察体として「蕃女」を描くとはいえ、真杉は「蕃女」の美貌の下に隠れる現実問題、つまり日本人男性との恋愛、私生児などといった問題に着眼するのに対して、地平は「蕃女」の乳房、体温、匂いから得た官能的な感動のみを強調する。性差と「見る」営為のあいだにある権力関係を明らかにしたマルヴィの論説は、「蕃女」のセクシュアリティに注目する帝国男性である地平の視線を説明できるといえよう。そのため、地平の視線には、「蕃女」に対して行使する植民地主義的な暴力のみならず、女性を性愛的な対象とみなす男性的な暴力も同時に内在する。

すでに見てきたとおり、「蕃女」を「性愛的見世物」として表象する地平の作品は、性差別を内包するジェンダー秩序を再生産する、男性的なまなざしを表すものである。このような「蕃女」の身体・エロスを「異国憧憬」の形態で表象する作品が、帝国社会に流布した結果、オリエンタルな帝国主義の形成を助長することとなった。この意味で、地平による「蕃女」の表象は男性的な帝国主義を物語るものでもある。

第3節 歴史事件の物語で語られる「蕃人」

台湾を表象する際に真杉も地平も「蕃人」に関する歴史事件に注目し、前者は「サヨンの鐘」を、後者は霧社事件を小説化した。この節では、歴史事件の語り方と「蕃人」をめぐる描写の仕方の差異を分析したうえで、歴史題材の選び方は作家それぞれがおかれたジェンダー秩序といかなる関係があるのかを試論する。

1. 「サヨンの鐘」における「蕃女」と戦争協力

いわゆる愛国美談「サヨンの鐘」は遭難事故にあったタイヤル族少女サヨン・ハヨンの実話に由来する。1938年9月27日、サヨンは応召される日本人警手・田北正紀の荷物を搬送する途中に丸木橋から足を滑らせ、激流に流され行方不明になった。サヨンが遭難した二日後に『台湾日日新聞』（1938年9月29日付）に「蕃婦落水、行方不明」という記事が掲載される⁴⁹。下村作次郎は事件当初の新聞、出版物などの資料に基づきながら、「サヨンの鐘」言説形成に至るまでの経緯や流布の過程などについて実証的な研究を行っている⁵⁰。氏によると、サヨンが遭難した2ヵ月後にリヨヘン社は盛大な青年団葬を行い、警務局理蕃課長をはじめ台北州警部の理蕃課長、蘇澳郡警部警察課長など、大勢の警察部理蕃関係の重役が参列した。同年12月と翌年1月に、台北州藤田知事は2度もサヨンの墓に参り、また1939年10月、サヨンの2周忌の際に「サヨン乙女の碑」を建立した。1941年4月14日に第18代台湾総督・長谷川清はサヨンを顕彰するため、「愛国乙女サヨンの鐘」と刻んだ釣鐘をサヨンの出身・リヨヘン社（戦後、現在の宜蘭県蘇澳鎮金丘村に移された）に寄贈した。このように僅か3年間で、台風後の増水した河流に落水した「サヨンの死」が、「サヨンの鐘」という愛国的なメロドラマにまで発展した。

応召された日本人「恩師」のため、犠牲になった「愛国乙女」物語は絵画、演劇、歌謡、小説、教科書などといったさまざまなメディアによって流布していった。それが広く伝播された理由について、下村は1937年8月14日、台湾が「戦期体制」に編入されてから日本が敗戦を迎えるまでの8年間の台湾文学を、「皇民化運動期文学」と定義したうえで、「サヨンの鐘」物語が大衆的なレベルで享受された「皇民化運動期文学」の典型である一方、台湾人に戦争協力を鼓吹する物語であると、指摘する⁵¹。言い換えれば、「サヨンの鐘」はあくまでも戦時体制下の「愛国乙女」物語として、もしくは「志願兵制度実施のための宣伝媒体」として利用されたものにすぎなかったのである⁵²。また李香蘭の出演映画『サヨンの鐘』（清水宏監督、松竹、1942）に関する評論でも、台湾における「サヨンの鐘」物語のプロパガンダ性のみが強調されている⁵³。

真杉は「サヨンの鐘」をモチーフに「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」を創作し、登場人物の名前は異なっているものの、後者は前者の続編である⁵⁴。「リオン・ハヨンの谿」において、サヨンがモデルとなったリオン・ハヨンの遭難に関する描写は、「サヨンの鐘」の通説に相似しているが、物語全体の焦点はその「恩師」・村西武美に集中し、犠牲者リオンの描写が非常に少ない。豊かな芸術的才能をもつ村西は大学卒業後、母を扶養するため、得意だった声楽や絵画関係の仕事に就かずには俳優となったが、不運に見舞われたあげく、長崎の行商人を経て台湾で教師を務め

る。盧溝橋事変の頃、女学生の「私」は台湾を旅行する際に、阿里山で「蕃人の教化事業に、一生を捧げる覚悟」で、「未開人の清純な性格を導く仕事」に献身する村西と数年ぶりに再会する。「蕃人」を庇護する理由で役人を殴り転任させられた村西は、「私」と再会した翌日にさらなる山奥に出発せねばならず、リオンは彼の荷物を背負う「蕃人」の一人であった。台北に戻りふたたび阿里山へ出発する「私」は、村西が応召されるのを聞いた後に、「リオン・ハヨンの谿」という新聞記事を見つけ、その記事に「村西武美氏は可憐な蕃女の殉死に胸を打たれ、激励され、一層奮発しながら、勇躍征途についた」とあるのを目にした⁵⁵。数日後、「私」は「リオン・ハヨン殉死の跡」という立札のある場所を訪れ、谷からリオンが常に腰に下げる鐘の音が聞こえてきそうな雰囲気のなかで、「死を間近に持つて仕事しよう」という言葉を心に刻むというところで物語が閉じられる。

真杉による「サヨンの鐘」物語は「蕃女」の死で完結せず、戦地へ赴いた後の「恩師」も描いている。「ことづけ」は表題通り、委託されたことづけを届ける話である。「日本の前線と銃後をつなぐほんの髪の毛位の細い一本の役割」でも果たしたい日本人女性の「私」は、日本から台湾を経由し「南支」の慰問講演へ出発する前に、友人からその兄・露原友二郎へのことづけを頼まれる。5年前から台湾で「蕃人」教育に従事する露原は軍隊へ応召され、今は広東に駐在する。露原と再会できた「私」は、別れのときに「愛国蕃女、サランの鐘、響く」という台湾新聞の切抜きを見せられ、露原のかわりに「サランの鐘」をつくように頼まれる。その記事の内容は、「阿里山トフヤ蕃のなかの一少女、サラン・ヨハンが、かつて勇躍応召、戦地に向かった露原友次郎氏の壮途を送る」ときに山谷に陥落し、その際に彼女は「立派な国語で、露原先生万歳！」と叫んだという。台湾で鐘をつく約束を果たした「私」は日本に帰ったあと、露原の兵隊が「ビルマ遮断に勇猛な奮戦をしてゐる部隊」に加わったことを聞く。「私」は彼に送った「還曆」の祝ひのちりめんのふくさが、うまくあの体を護つてくれますやうに。サラン・ハヨンの鐘を、あの勇士の手に打たしたい」と思いながら、露原からの安否の返事を待つ。

「リオン・ハヨンの谿」のリオン・ハヨンと村西武美、「ことづけ」のサランと露原友二郎は、それぞれ「サヨンの鐘」物語のサヨンと日本人警手に相当する人物である。「リオン・ハヨンの谿」では、リオンは立派な国語(日本語)をしゃべることができるとされても、「ワタクシハ、リオン・ハヨントイヒマス」や「露原先生万歳」以外の言葉は付与されず、読者は語り手や彼女を眺める日本人の視線や言葉によってしかリオンを想像できない。同じことは「ことづけ」のサランについても言える。つまり、サヨンがモデルとなったリオンもサランも、物語展開上の記号にすぎず、死という通過儀礼によってはじめて日本人男性の愛国心を煽る「愛国乙女」の意味が与えられ、帝国のアウトサーダーからインサーダーに変身させられる。このような記号にすぎない「愛国乙女」とは対照的に、作品は「恩師」にあたる人物の描写に力点を置いている。例えば「リオン・ハヨンの谿」では、村西が台湾へ渡るまでの経緯に作品全体の半分以上の頁数が費やされている。しかも「恩師」の描写をめぐって、両作品とも「蕃人」教化の抱負と、犠牲者「蕃女」に激励され勇躍に征途に赴く愛国心、この二点を強調している。

さらに忘れてはならないのは「愛国乙女」とその「恩師」の愛国精神に感動する日本人女性である「私」の存在である。「リオン・ハヨンの鐘」では、村西が兵隊へ応召される話を聞いた「私」は、「常に、死と共にあるものは美しい」という格言を思い浮かべる。「ことづけ」の最後では、「私」はビルマ・ルート遮断に奮戦する露原の無事を祈願する。このように真杉は植民地の山地で犠牲になった「愛国乙女」から得た感動や、死も顧みず最前線で戦闘する兵士に対する思いや感動を、銃後社会の女性である「私」の心情を通して表現し、さらに「常に、死と共にあるものは美しい」とまで語らせている。この点において、真杉による「サヨンの鐘」物語は銃後小説の性格に富んでいることがうかがえよう。

「サヨンの鐘」は「戦争協力物語」の格好の題材だったが、場所によって享受される形も違ってくる。皇民化運動の推進とともに派生した皇民化運動の申し子だという、下村の論説に代表されるように、「サヨンの鐘」をめぐる研究の大部分は台湾での受容問題に着目している。だが、すでにみてきた通り、「サヨンの鐘」は台湾だけではなく日本でも享受されていた。真杉による「サヨンの鐘」物語からみると、「サヨンの鐘」は台湾では「皇民化運動期文学」として受容されたのに対し、日本では銃後小説として受容されたことがうかがえる。

ほかの「蕃女」の描写と同様に真杉も「愛国乙女」サヨンを被観察体として描いたが、第2節で取り上げた作品と比較すれば、人物描写に二つの変化が見られる。それは美しい「蕃女」が「見られるための対象」から、神聖な「愛国乙女」という代名詞に変わってゆくことと、「蕃女」と日本人男性との恋愛、結婚及び私生児などの問題にとり代わり、日本人女性が「愛国乙女」の「蕃女」から受けた感動が書かれることである。この変化、いわば「蕃女」を戦争協力の題材として扱うことは、作家自身の体験につながると考えられる。1940年前後から、真杉は女性作家が組織した戦争協力の文化団体「輝ク部隊」に入会し、終戦まで女性文化人として兵隊慰問団講演や様々な銃後建設に携わり、積極的な戦争協力の態度をとった。そこで「愛国乙女」とされる「蕃女」の歴史事件に注目し、女性による戦争協力を物語化するのは、作家自身の体験にかかわる一方、作家がおかれた社会のジェンダー構造にも関連すると思われる。つまり、帝国の銃後社会には、前線で戦う兵士を後援する母・妻・娘などの女性がいる。それに似たような形で、植民地の山地にも戦場へ向かう兵士を後援する「蕃女」がいる。そのため、男が前線で、女が銃後だという概念を表すには、「サヨンの鐘」が格好の題材となるのである。一方、真杉の「サヨンの鐘」物語における銃後小説としての書き方は、銃後の役割を女性に担わせるものでもある。この意味で、男が前線で女が銃後だという描き方は、真杉が選び取った戦争協力の手段を表しているとも考えられる。

2. 「霧社事件」と「蕃女」のセクシュアリティ

霧社事件（別称・霧社セーダッカの抗日蜂起事件）は1930年10月27日に、台湾中部山地・霧社で発生した大規模な先住民の抵抗運動である。霧社小・公学校と、霧社周辺の先住民子供たちのための連合運動会が開催された当日、開会式が開始するやいやな、タイヤル族のセイダッカ・ダヤ約300人が運動会場を襲撃し、日本人134名、台湾人2名が犠牲になった。大量の日本人犠

犠牲者を出したこの事件のあと、日本政府は軍隊を派遣し大規模な鎮圧活動を行い、国際法で禁止された毒ガスまでも使用した。サラマオ抗日事件以来、10年ぶりに起こったこの先住民抵抗運動は経済（強制された過酷な労役と山地資源の占有）と文化など、あらゆる面にわたる不合理な理蕃政策に原因があった⁵⁶。

霧社事件を最初に小説化したのは『蕃人ライサ』（山部歌津子、銀座書房、1931.1）で、本格的に扱ったのは地平の「霧の蕃社」（『文学界』、1939.12）である⁵⁷。「霧の蕃社」は霧社事件が発生した当日の運動会会場の惨状から語り始める。この作品は「恐るべき惨事の原因を知るためには、古く明治四十二年に遡らなければならぬ」として、物語の時間を1909年に遡り、事件の歴史的な経緯をたどる一方、当時発表された調査書と作家の豊富な想像力とを交錯させながら、「恐るべき惨事の原因」を語っている。日本人巡査と「蕃女」との結婚が理蕃政策によって奨励された時代に、霧社警察署勤務の内地人巡査・近藤儀三郎は、マヘボ蕃社の頭目モーナルルーダオの妹テワスルーダオと結婚したが、その後、妻を置き去りにし蒸発する。モーナルルーダオは妹の結婚の破綻を内地人から受けた侮蔑だと受け取る。加えて、1930年霧社小学校校舎建設の際の労働力搾取と賃金問題、巡査殴打事件、警察分署主任の不当な支配による抑圧事件もあり、モーナルルーダオは種族一同に呼びかけ反抗を実行する決意を下す。事件は結局、警察と軍隊に鎮圧された。「霧の蕃社」は「蕃人」蜂起の原因のみならず、鎮圧の経緯などについても詳細に語り、事件参加者の「蕃人」たちすべてが自殺するなか、物語が閉じられる。

この作品について、河原は「単に史実の掘り下げだけでなく、そこに作者の豊かな想像と調査とを織りまぜながら、作品全体にふくらみをもたせ、浪漫的味わいの作品」⁵⁸であるとし、尾崎秀樹は「異国趣味」に基づく「楽天的」な「蕃族」の描写は、「日本的な支配者が考える残忍至極な高山族とはまるで違う印象を読者に与えた」と指摘している⁵⁹。一方、阮文雅は植民地主義的批判の観点から次のように論述している。「高圧的な理蕃政策の破綻を披瀝しながらも」「原住民が圧迫された事実を粉飾」する描写は、「台湾の蕃地統治に対する地平の矛盾した考え」、つまり「原住民に対しての憧憬と差別のアンビヴァレントな感情」⁶⁰を映し出しており、そこから「宗主国国民としての作者の矛盾と限界」⁶¹が読み取れるのだと。このように史実との照合にせよ、植民地批判にせよ、「霧の蕃社」をめぐる先行研究の多くは作家の「南方憧憬」とされる抒情詩的な創作手法を無批判に受け入れている。しかしこの抒情詩的な創作の背後には、性差別的なジェンダー秩序が内在していることが従来見過ごされてきたのではないか。この節では、「蕃人」と日本人との関係の描写に着目し、ジェンダーの視点から「霧の蕃社」を試論する。

「霧の蕃社」では、「蕃人」は単なる被観察体ではなく、語り手によってその心情が代弁されるのである。以下はモーナルルーダオの妹・テワスと近藤との結婚についての引用である。

理蕃政策上、内地人巡査が蕃婦と結婚することは、上司の方でも大に奨励してみたのである。結婚の申しこみを受けた時、テワスに否応のある筈はなかつた。蕃人の女が内地人の男に憧憬を感じてゐるのは、昔も今も同じである。しかも、この場合相手は普通の男ではない。結婚すれば大人の奥さんになれるのである。テワスは有頂天にさえなつてゐた。（略）麻の着

物も、まつ赤な脚絆もぬぎすて、テワスは内地風の浴衣を着てみた。無器用な手つきで炊事もしたし、お針仕事も覚えようと懸命になつてみた。心をこめて内地人になりきろうとしてみたし、命をかけて夫近藤を愛してみた。それは仕合はせな思ひであつた。近藤巡查も亦新しい生活に決して不満ではなかつた。新しい妻はけだもののように逞しく生き生きした体と、決して内地人に劣らない容貌とをもつてゐる。その上、勢力家の頭目を義兄にもつたために、土地の蕃人たちを禦してゆくのに好都合である。

(「霧の蕃社」⁶²)

日本人男性と結婚すればより良い生活が手に入るという思いから、「蕃女」は帝国男性を憧憬する。ましてその相手が支配者側の権力を持つ巡查であるから、テワスは「体がしびれる位嬉かつた」。結婚後、テワスは着物を着て、炊事と裁縫を学習し内地人女性のようになりきろうと努力する。作品において炊事も裁縫もし、「命をかけて夫を愛する」テワスは幸せだとされている。

テワスの結婚生活をめぐる描写にはいくつかの含意がある。まず「蕃人」の生活形式から脱出することを望むところからは、生活スタイルに優劣をつけることで、「蕃人」開化事業を自らの責任だと自負する支配者側による発想がうかがえる。また古今問わず「蕃女」が内地人男性を憧れるという言述は、支配者の作りだした物語であり、帝国男性のナルシズムの反映でもある。一方、帝国女性の象徴だとされる布(浴衣)を被せることによって、「蕃女」に帝国女性として、主体を再構築することが要求される。このような「内地風の浴衣」を着て「不器用な手つき」で炊事、裁縫を懸命に覚え、「命をかけて」夫に仕えるテワスの人物造形は、家父長制的社会構造における帝国女性のステレオタイプの表現だと考えられる。

しかし「生蕃の女」との結婚は、しだいに近藤にとって肩身が狭いものとなる。帝国女性に憧れはじめた近藤であるが、「大柄な体を畳の上に窮屈さうに坐らせ、無器用な手で自分の着物をつくろつたり、台所でいそいそと慣れない煮たきに心をくばつてゐる哀れな妻の姿が眼に入る」⁶³と、「この気の毒で、善良な妻をすてることはできない」と葛藤する。テワスと心中をする決意にいたるまでに、近藤は自分の良心に苦しめられる。それとは対照的に、近藤が居なくなったあとに再婚したテワスは新しい生活に満足し、「近藤との過去は、楽しかつた新婚の頃のことは勿論、悲しかつた生別の記憶さえ、既にもう念頭からは全く消え去つた風にしか」見えず、ふたたび山豚を追いかける生活に戻る。結婚観の差異をめぐる描写は、一人の夫に執着しない「蕃女」の結婚観を暗示するものだと考えられる。「蕃女」のセクシュアリティをめぐる、作品ではさらに性に奔放な女性を表象することによって、家父長制的な帝国社会の女性と異なる「蕃女」のイメージが補強される。

タイヤル族といふ蕃人は、昔から武勇にすぐれてゐることと、風紀がきびしいのと知られてゐる。しかし、たまに例外があるのは断わるまでもないところで、このルビナライは生来多情な女であつた。娘の頃からとかくの噂は絶えなかつたが、素行がおさまらないのは結婚したのちも同じことであつた。怪しい男が家のぐるりで口琴を吹いて彼女を呼んでゐるのや、

彼女が男といつしよに粟畑のなかへ消えてゆくのを見かけた者も少なくないのである。養子に貰ったヒポサツポにもルビナオイは間もなく倦きがきた。そして遂ひには離縁してしまった。

(「霧の蕃社」 64)

不貞な妻に我慢できない霧社事件参加者の一人・ヒポサツポは、離縁後もルビナオイを忘れられず、ついに「首狩りをすればいい。首を伐つて武勇を示せば、人々の尊敬をかり得るし、あはよくば再び女までも手に入れることができる」と考え始める。

地平が執筆する際にどのような資料を参考したのかを推測するのは難しいが、台湾総督府警務局が発表した『霧社事件誌』では、事件の原因として挙げられる「不良蕃丁の画策」の項にルビナオイについて以下のように書かれている。「多情にして屢々埔里街に出ては本島人に売淫を為し、或は社内の蕃丁パワン・ノーカン等と姦通など乱行甚だしかりし」⁶⁵と。確かに「霧の蕃社」におけるルビナオイの人物造形は、『霧社事件誌』で書かれる調査記録とさほどの違いがない。しかし、「蕃女」の身体や性的な暗示をめぐる表象が地平の作品の随所に見られることから、ルビナオイのエピソードは単なる発表された「史実」に基づくものだと考えられない。また岡林は、地平がヒポサツポのエピソードを通して、「『南方の文学』の一要素である『神話的空想力とか、熱情的な飛躍性』をその『野性』への憧憬として表現しよう」⁶⁶としたとする。氏はヒポサツポの行動原理を作家の^{プリミティブ}原始性への憧憬として捉えることにとどまり、「蕃女」に関わるセクシュアルな描写に触れていない。

セクシュアリティは自明なものではなく、セクシュアルな表象にはさまざまな文化的要素や既成概念が内在している⁶⁷。「セックスは両足のあいだに、セクシュアリティは両耳のあいだにある」というアルデローンとサーケンダールの言葉に代表されるように、セクシュアリティは根源的に「自然な」現象ではなく、社会的・歴史的諸力の産物であり、ジェンダー、既成概念、偏見、道徳的規制などによって作られた歴史的構築物である⁶⁸。したがって「蕃女」のセクシュアルな表象にも支配／被支配、見る／見られる、男性／女性、野蛮／文明など、様々な権力構造が存在している。

「霧の蕃社」では、モーナルーダオは日本人男性に置き去られたテワスを不憫に思い、事件を起こしたとされる。また、事件参加者のヒポサツポは「素行がおさまらない」妻から受けた恥をはらす理由で、タイモポホックは妻を手に入れる理由で霧社事件に参加する。つまり「蕃人」男性が事件を起こすきっかけとなるのは、常に「蕃女」である。しかも、テワスは一人の夫に執着しない女性として、ヒポサツポは結婚後も夫以外の男性と関係を持つ女性として描かれているように、霧社事件の起因の一つだとされる「蕃女」たちは、帝国の家父長制的な社会制度から逸脱した主体として表象されている。

このような「蕃女」の描写は男性中心主義に基づく発想だといえよう。霧社事件を小説化する際に、地平は霧社事件にまつわる諸史実から「蕃女」をめぐる部分に力点をおき、さらに貪欲な「蕃女」によって事件を描写している。「蕃女」に注目し歴史事件を説明することは、作家の帝国

男性的なオリエンタリズムに関連しているのみならず、男性に偏る歴史記述にもよく見られる描写である。なぜなら、女性に歴史事件の責任を問うことは、男性に偏る歴史記述からきた発想だと考えられるからである。それと性に奔放な「蕃女」で歴史事件を説明するなかには、歴史的に構築された家父長制的な道徳観による批判も潜んでいることから、「霧の蕃社」はジェンダー構造における男性中心主義的な創作なのである⁶⁹。

第4節 植民地台湾表象とジェンダー

地平の台湾作品では、「原始的な亜熱帯の風物と自意識を持ち合はさぬ土着民や蕃人」といった異国趣味・南国憧憬に彩られた植民地が描かれる一方、植民地で優遇される帝国男性のエピソードが多く織り込まれている。植民地に在住する帝国女性の不幸な運命を描き出す真杉の初期作品にある、「植民地」＝「帝国女性の墓」といった構図と比べると、性の誘惑と清純な台湾人少女を題材にした地平の「南方憧憬」は、帝国男性的なオリエンタル趣味に溢れているように見える⁷⁰。したがって、地平による台湾表象は「植民地」＝「南方憧憬」＝「帝国男性的なオリエンタリズム」といった構図によって支えられる。しかも「帝国男性的なオリエンタリズム」に、性差別的な社会構造を再現する装置が内在している。

作品「蕃人の娘」には、「蕃女」が部屋のなかで帝国男性に媚を売る場面がある。そのとき屋外に疎外される「蕃人」男性は暗闇のなかで部屋の周囲を徘徊し、鋭い目でなかを覗くことしかできない。「蕃女」たちに拒絶されたのは、彼らは象徴的な意味で帝国に去勢されてしまったからである。同じことは「霧の蕃社」についても言える。「霧の蕃社」では、帝国男性を憧憬する「蕃女」に無視された恥をはらす理由で、「蕃人」男性は霧社事件を起したエピソードが書かれている。いわば霧社事件は、「蕃人」の男性が自らの男性性を取り戻すための、「蕃女」を帝国男性から奪いかえす事件だと、意味づけられている。

「霧の蕃社」では、霧社事件を以下のように比喩している。「蕃人」の「民族的な凶暴性や原始性や、謂はば生理的に女性としての機能をやうやく喪はんとする初老の婦人の活力と同じに、既に絶点から下降し始めて」、そして事件は「老境を目前に見る婦人が、青春への思慕と執着とのために、生理的な焦慮と煩悶とをかさね、時に意外な、則に外れた行動へ走るのと同じ事情」⁷¹だと。つまり霧社事件は「生理的に女性としての機能をやうやく喪はんとする」「蕃人」が、「文明へ最後の格闘」として起こした事件である。このような「蕃人」を老婦人に換喩する語り方は、歴史的に文化的に構築された性差のメタファーを用い、帝国と「蕃人」との非対称的な関係を表現するものなのである。

姜尚中は日本で形成されたオリエンタリズムを論ずる著書のなかで、帝国の心象地図における性差を喚起するようなメタファーは、非対称的な関係を表すものだと指摘している。「<男>＝植民者＝帝国」によってはじめて代表される<女>＝被植民者＝「蕃国」といった植民地主義的な心象地図は、「東洋ニオケル欧州的新帝国（井上馨「条約改正問題意見書」）を目指した歴史の所産である」⁷²と。この意味で「蕃人」を「初老の婦人」に例える「霧の蕃社」も、この植民地主義

的な心象地図の上にあるのである。

霧社事件は結局、失敗に終わった。「蕃女」は「蕃人」男性の男性性を補完する客体であるのと同じように、「蕃人」は帝国の男性性を補完する客体である。「霧の蕃社」の最後に書かれた、台北帝国大学文政学部土俗学教室の一隅に収められたモーナルーダオの死体は、帝国の勝利を物語るものであり、帝国の男性性を補完する象徴でもある。このように、「霧の蕃社」は帝国男性的なオリエンタリズムの延長線上にある作品だと考えられる。

すでに見てきたとおり、霧社事件は帝国男性的なオリエンタリズムを表象する格好の題材であった。男女間の欲望から創作された「霧の蕃社」は性差別的な概念が内在し、これは作家がおかれた社会のジェンダー秩序、いわば男性中心主義的な社会構造に一致しているのである。この意味で、「霧の蕃社」は地平の男性中心主義的な概念を表す作品なのである。

同じく帝国に属する立場で「蕃人」を描いたといっても、地平より真杉の表象のほうがより複雑な構造を孕んでいる。真杉の初期作品では、帝国女性の悲劇が繰り返し語られているのは先述したとおりである。しかし 1939 年の台湾旅行後の作品において、悲劇的な帝国ヒロインが登場しなくなるのに代わり、台湾人女性や「蕃女」の顔立ちの美しさが強調され、帝国旅行者のまなざしが色濃く現れはじめています。

植民地を対象化し南方憧憬の言説を補強する担い手となっていく真杉の変化には、男性的な言説を内面化する行為が潜んでいるように思われる。真杉も地平も、「蕃女」のセクシュアリティを題材に創作した。だが、乳房、皮膚、体温の感覚描写を伴いながら、「蕃女」をセクシュアルな想像の対象として描写する地平の作品とは対照的に、真杉の作品では「蕃女」の美貌が強調されながらも、私生児の題材を含む、山地における植民地支配的暴力が言及される。内地人男性との関係を通して「蕃女」たちの社会的な立場に同情する真杉の作品は、帝国女性の屈折した心理的構造を浮き彫りにしているものである。その屈折した心理的構造とは、つまり優越感をもつ支配者の立場に立ちながら「蕃女」を眺める際に、自分がおかれた家父長制的社会構造も同時に喚起される心象風景である。私生児として生まれた経験と、女という主体としての立場は、真杉をして歴史的に文化的に構築された性差別的な社会構造におかれる女性への共感を喚起させるのである。

しかしながら「蕃女」に対する同情は長く継続せず、戦争の激化に伴い真杉にさらなる変化が生じてくる。戦争を契機に、戦争協力の主体として女性が主体化される。銃後小説として「サヨンの鐘」を小説化することは、戦争協力によって男性と対等な社会地位を獲得する行為と同様だと捉えられる。この意味で、真杉による「蕃女」の表象は帝国主義的なまなざしを具象化したもののみならず、帝国女性がいかに植民地を語ることによって自らの銃後の主体を構築していくかを物語るものでもある。

おわりに

本稿では、中村地平と真杉静枝を取り上げて、今まであまり注目されてこなかった、ジェンダーと植民地台湾表象との関係を試論した。前述したように、植民地台湾を表象する作家の大半が

男性だったため、彼らの創作は容易に「南方憧憬」や「異国趣味」と読まれてしまう。だが、ジェンダーの視座を据えて分析した結果、地平の「南方憧憬」と「異国趣味」と評価されている特色は、植民地という他者に投与する帝国男性的なオリエンタリズムのまなざしに関連するものだということが分かる。そのため、「蕃女」のセクシュアリティをめぐる身体描写を、「原始性」に対する憧憬として捉える従来の言説は、結局、男性的な言説を再生産することとなり、「蕃女」に二重の暴力（植民地支配の暴力と性差別的暴力）を与えることとなるのである。

一方、ジェンダーの視点による分析は、従来あまり注目されてこなかった帝国女性作家と植民地支配との関係をも浮上させる。初期の作品において、真杉は植民地台湾に在住する、日本人女性の不幸の結婚を描いた。1939年の台湾旅行後、真杉は「蕃女」と日本人男性との恋愛・結婚・私生児問題に注目し創作した。これらすべては、同じ時期に発表された地平の作品にはあまり見られない観点である。この意味で、台湾表象をめぐる、家父長制的社会構造に抑圧される女性（日本人女性）への着目や、植民地支配が女性（「蕃女」）に行使した暴力への着目などは、女性作家の作品ならではの特徴だと言えよう。

しかしながら山地における私生児のような現実問題はまもなく、愛国美談とされる「サヨンの鐘」をめぐる一連の創作によって隠蔽されてしまう。問題がさらに探られなかったのは、作家の限界のみならず、時局の制限もあったと考えられる。1940年以降、戦争が激化になるにつれて、真杉は銃後の視線で「蕃女」の愛国物語を再生産する担い手となった一方、ふたたび植民地支配に関する現実問題に触れることがなかったことから、真杉も植民地支配にも加担する一人となった。したがって、1939年以降に発表された真杉の台湾関係の作品は、真杉がいかにか女性として、植民地支配協力と戦争協力に加担していったのかを物語るものとして読めるのである。

コロニアル研究はそもそも権力構造を解体することを目的とするが、ジェンダーの視点を看過すれば、権力構造を解体するどころか、既存の抑圧装置を再生産することとなりかねないのである。今回は日本文壇で活躍した作家がおかれたジェンダー秩序を中心に分析した。言うまでもなく、同じ問題は同時期の台湾文壇で活躍した作家のあいだにも存在している。これについては、今後の課題にしたい。

注

- 1 ここでは植民地時期（1895～1945年）の台湾を題材にした作品群をすべて植民地台湾表象と称する。
- 2 性差の問題に関する論文や、女性作家に関する論文の数は決して多いとはいえないが、そのなかでは姚巧梅の「植民地台湾に見る女性像——佐藤春夫「女誠扇綺譚」における沈女と下婢——」（『社会学』17、2002）と星名宏修の「〈共感〉の「臨界点」——徳澄晶の作品を読む」（『野草』2004.2）が挙げられる。また、女性作家にとって植民地を語ることはいかなる意味をもつのかについては、拙稿「坂口禰子の移民小説と戦争協力」（『天理台湾学会年報』、2004.7）を参照。
- 3 1939年以降の台湾旅行について、真杉の伝記とされる『悪評の女』（十津川光子、虎見書房、1968.1）では詳細な記述がなく、年代記載にも間違いがある。また1939年の旅行は病気の母の見舞いが目的だとされている。だが、戦時体制に巻き込まれる当時の文壇状況と、のちに真杉が発表した戦争協力の作品と合わせて考えれば、これは戦争小説を書くための準備旅行でもあったと考えられる。こ

の点については別論に譲りたい。

- 4 真杉静枝は昭和文壇におけるスキャンダルの女王だと言っても過言ではない。彼女はかつて武者小路実篤、中村地平の恋人であり、芥川賞を受賞した中山義秀の元妻でもあった。1953年、イギリスで主催されたペンクラブに出席したときの逸話も、のちに石川達三(『花の浮草』、新潮社、1956)、火野葦平(『寂しきヨーロッパの女王』、(『新潮』、1955.1)などによって小説化されている。
- 5 終戦までに真杉は2回台湾へ旅行した。真杉の台湾旅行について、詳しくは拙稿「植民地を語る苦痛と快樂——台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成」(『日本台湾学会』5、2003.5)を参照。
- 6 『若草』、1929.1
- 7 『桜』、1934.1
- 8 『婦人文芸』、1936.8
- 9 「南方の墓」、引用は『日本統治期台湾文学日本人作家作品集 別巻 内地作家』(中島利郎・河原功編、緑蔭書房、1998.7)より、272頁。
- 10 「南方の墓」、同上、281頁
- 11 『婦人公論』、164～165頁
- 12 「幼い頃から南方に強く心をひかれてみた僕は佐藤春夫氏の「女戒扇奇譚」や「旅びと」など、台湾を題材にした小説のいくつかをよむと、矢も楯もたまらない気もちになった。九州のM中学を卒業すると、ひとつには入学試験に数学もなかつたところから、僕は台湾の高等学校を受けた。」(『三等客船』(1938.8)、『仕事机』(筑摩書房、1941.3)による引用、108頁)
- 13 これについて、河原功は詳細な実証調査を行った。氏によると台北高等学校時代に、地平は台湾における最初の印刷文芸雑誌『足跡』(1927年2月創刊、3号をもって休刊)を発刊した。1号から3号にかけて「首途」、「温泉漫筆」、「或宵の尾寺」、「浦」などの習作を発表した。2年生より文芸部委員として校友会雑誌『翔風』(1926年3月創刊)を編集し、2号から7号にかけて「ピヤナン鞍部縦走動物学的見聞」、「ウオラス線と紅頭嶼」、「蕃人の楽器ロボ」、「台湾蕃族巡礼」、「台湾蕃人の弓に就て」などの論文を発表し、また創作に「発狂」、「天理教」がある。(河原功、『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』、研文出版、1997.11、24～35頁)
- 14 『作品』、1932.1
- 15 『四人』、1932.2、のち「淡水」の題目で『台湾小説集』(中村地平、大木書房、1943.11)に収録される。
- 16 『四人』、1933.1
- 17 『行動』、1934.5
- 18 そのほかに、「白雲がなぜ窪地の上に鬨いているか」(『四人』、1932.3)、「きつつき」(『作品』、1933.9)、「人類創世」(『作品』、1934.11)、「大虚など」(『日本浪漫派』、1938.1)などがある。
- 19 中村地平、『中村地平全集』全3巻、皆美社、1971.2
- 20 浅見淵、「解説」、『中村地平全集 1』(皆美社、1971.2)、477頁
- 21 河原功は「中村地平の台湾体験——その作品と周辺」(『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』、前掲書、24～51頁)において、「南方的色彩」、「南方志向」の観点で地平の「南方憧憬」を論じている。
- 22 台北：鴻儒堂出版社、1991.5
- 23 鈺脈社、2002.2
- 24 「癒しとしての南方文学」の言説を踏まえながら、植民地主義的批判の観点で地平の台湾作品を分析する論文には、阮文雅「中村地平「霧の蕃社」——重層的なジレンマ」(『現代台湾研究』24、2003.3)、岡林稔「中村地平と台湾——「熱帯柳の種子」をめぐって——」(『社会文学』19、2003.9)などがあり、二つの論文とも「作家の執筆意図」から論を展開するが、「南国憧憬」、「異国憧憬」とジェンダーとの関係を看過している。
- 25 『熱帯柳の種子』(中村地平、版画荘、1938.3)に所収、8～17頁
- 26 岡林稔、「中村地平と台湾——「熱帯柳の種子」をめぐって——」、前掲書、110頁
- 27 『熱帯柳の種子』、前掲書、3頁
- 28 注26に同じ、103頁
- 29 『熱帯柳の種子』、前掲書、2～3頁

- 30 『文学者』、1939.5
- 31 『文学界』、1939.9
- 32 初出不明、『甲斐なき羽撃き』(協力社、1940.9) 所収
- 33 『婦人公論』、1939.5、329 頁
- 34 『甲斐なき羽撃き』、前掲書、239 頁
- 35 アウイ・ヘッパハ述、許介麟、林光明解説、『証言 霧社事件』、草風館、1985.12、25 頁
- 36 中村地平、「旅びとの眼——作家の観た台湾——」、『台湾時報』1939.5、61～63 頁。蜂矢宣郎は、「新高」と「タイザン」はそれぞれ「能高」と「タロワン」の誤記だと指摘している。(『南方憧憬——佐藤春夫と中村地平——』、前掲書、71 頁)
- 37 『知性』、1940.10～1941.5
- 38 『知性』、1940.8
- 39 初出誌不明、1939.4、『仕事机』(前掲書) に所収
- 40 『文藝』、1939.9
- 41 初出不明、『小さい小説』(河出書房、1940.8) に所収
- 42 このほかに随筆集『仕事机』(前掲書) に「蕃界遊記」(1939.10)、「台湾の温泉」(1939.6) などが収録される。いずれも初出誌不明。
- 43 真杉の伝記とされる『悪評の女——ある女流作家の愛と哀しみの生涯』を著した十津川光子は、1939 年の台湾旅行は真杉と地平にとっての「さよなら旅行」でもあったと述べている。このことから、作中人物・三吉の境遇は地平と真杉との関係の投影だと考えられる。また、台北高等学校卒業の小説家・山名が小説を書く目的で 10 年ぶりに台湾を訪問するという設定は、作家自身の実体験とも一致している。したがって「蕃界の女」における三吉と山名のモデルは、地平本人だと考えられる。
- 44 中村地平、『蕃界の女』、新潮社、1940.5、6～7 頁
- 45 同上、16 頁
- 46 同上、40 頁
- 47 「ハナ子は茶箆筒の中からもなにかとりだすと、すると台所の方へ消へていつたが、僕は彼女のすんなりとした、そのくせ、どこか肉のしまつた健康さうな体を、いつもとは違つた目で追つた。蕃人の娘と聞いたせいか、体の隅々、例えば足の先や指先にまで、なにかけものじみたやうな、野性味に溢れたやうな、激しい弾力に富んだ美しさが漲つてゐるやうに感じられた。あの澄んだ、すこし鋭すぎる眼つきまで山奥に住むけものやうな、激しい凶暴な情熱をひそめてゐるやうな気がした。(中略) 手の届かない遠い山奥の樹の枝に、たつた一つ熟れてゐる果実でも想像するやうな、はるかな気持で、僕は年少らしく、彼女の姿を好奇的に心のなかに儚く描いてみるのがあつた。」「蕃人の娘」、『台湾小説集』、墨水書房、1941.9) ここでの引用は『日本植民地文学精選集 20 台湾小説集』(中村地平著、河原功監修、ゆまに書房、2000.9)、72～74 頁)
- 48 ローラ・マルヴィ、「視覚的快樂と物語映画」、『新映画理論集成 1 歴史/人種/ジェンダー』、岩本憲児・武田潔・斉藤綾子編、フィルムアート社、1998.2、131 頁
- 49 記事の梗概は、「リヨヘン駐在所田北警手」の荷物を搬送する途中に、サヨンが「南溪に架設した仮木橋を通行中、足を滑らし折から前夜来の豪雨に増水した激流中墜落行方不明」となり、「墜落地点より十五丁の下流において、サヨンの担送したトランク三個を発見したが、死体はまだ発見に至らない」というものである。「サヨンの鐘」に関する部分は、下村作次郎の「「サヨンの鐘」物語の生成と流布過程に関する実証の研究(1)」(『天理台湾学会年報』、2001.3、161 頁)、同、「各種『サヨンの鐘』の検討——劇本・小説二冊・シナリオ・教科書——」(『中国文化研究』、天理大学国際文化学部中国学科研究室、2002) を参考。
- 下村によれば、警手は巡査の職位より下位にあり、補助的な職務を担当するという。(「「サヨンの鐘」物語の生成と流布過程に関する実証の研究(1)」、同上、161 頁)
- 50 「「サヨンの鐘」物語の生成と流布過程に関する実証の研究(1)」、前掲書、164 頁
- 51 「日本から逆輸入された『サヨンの鐘』の物語——中央舞台の台湾上演と呉漫沙の『サヨンの鐘』」、『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』(東京大学出版会、2002.12) 所収
- 52 「「サヨンの鐘」物語の生成と流布過程に関する実証の研究(1)」、前掲書、170 頁
- 53 洪雅文の「戦時下の台湾映画と『サヨンの鐘』」(『映画と「大東亜共栄圏』』所収、岩本憲児編、森

話社、2004.6) が挙げられる。1994年に台湾国家資料館主催の「蕃人映画祭」に『サヨンの鐘』が上映される際に、映画関係者の座談会が開かれた。洪の論文では、座談会の時に交わされたサヨンの事件の真偽をめぐる議論と、同時代を経験した人々の言述が紹介されている。

- 54 真杉の短編小説集『ことづけ』(新潮社、1941.11)に収録されるこの2篇はいずれも初出不明
- 55 『ことづけ』、同上、216頁
- 56 霧社事件に関してはさまざまな研究がある。ここで参考したのは『台湾霧社蜂起事件——研究と資料——』(戴國輝編、社会思想社、1981.6)、『抗日霧社事件の歴史 日本人の大量殺害はなぜ、起こったか』(鄧相陽編、下村作次郎・魚住悦子訳、日本機関紙出版センター、2000.6)と、事件体験者による『証言 霧社事件』(前掲書)である。
表紙に「部外秘」の印が付く、当時発表された資料である『霧社事件誌』(台湾総督府編、『台湾霧社蜂起事件——研究と資料』より引用)のなかで、事件の原因を11項にまとめている。1.蕃人の本性、2.マヘボ社頭目モーナ・ルーダオの反抗心、3.バッサオ・モーナの家庭的不満、4.吉村巡査殴打事件、5.警察官の規律の弛緩、6.警察官の蕃婦妻帯問題、7.事件前の諸工事、8.霧社小学校寄宿舎建築工事、9.不良蕃丁の画策、10.本島人の策動、11.人事行政の欠陥。
- 57 河原功、「日本文学に現われた霧社蜂起事件」、『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』、前掲書、84～87頁
- 58 「地平の台湾体験」、『台湾新文学運動の展開 日本文学との接点』、前掲書、43～44頁
- 59 尾崎秀樹、『旧植民地文学の研究』、勁草書房、1971。引用は蜂矢宣朗『南方憧憬——佐藤春夫と中村地平——』(台湾：鴻儒堂出版、1991.5)による。
- 60 阮文雅、「中村地平「霧の蕃社」——重層的なジレンマ」、『現代台湾研究』24、2003.3、44頁
- 61 同上、47頁
- 62 「霧の蕃社」、『蕃界の女』、新潮社、1940.5、232～234頁
- 63 同上、240頁
- 64 同上、254頁
- 65 戴國輝編、『台湾霧社蜂起事件 研究と資料』、前掲書、379頁
- 66 「《南方文学》の成立」、『《南方文学》その光と影——中村地平試論』、前掲書、134頁
- 67 セクシュアリティの概念について、『セクシュアリティの社会学』(ジェフリー・ウィークス著、上野千鶴子監訳、岩波書店、1996.2)、『セクシュアリティ』(ジェフリー・ウィークス著、上野千鶴子監訳、河出書房新社、1996.4)、『ナショナリズムとセクシュアリティ 市民道徳とナチズム』(ジョージ・L・モッセ著、佐藤卓己ら訳、柏書房、1998.5)を参照。
- 68 「セックスを語る言語」、『セクシュアリティ』、同上、15～22頁
- 69 「霧の蕃社」は男性中心主義的な作品である一方、強制的な異性愛主義の作品でもある。強制的な異性愛主義とジェンダーとの関係について、『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(ジェディス・バトラー著、竹村和子訳、青土社、2001)の「<セックス/ジェンダー/欲望>の主体」を参照。
- 70 1939年の台湾旅行を境目に真杉の台湾表象に大きな変化が見られる。初期の作品のなかで語られる「女性の墓」のような台湾は次第に明るく表象されるようになる。その変化については、拙稿「植民地を語る苦痛と快楽——台湾と日本のはざまにおける真杉静枝のアイデンティティ形成」(前掲書)を参照。
- 71 「霧の蕃社」、『蕃界の女』、前掲書、260頁
- 72 「日本の植民地政策学とオリエンタリズム」、『オリエンタリズムの彼方へ』、岩波現代文庫、2004.4、106頁

※ 本稿は日本近代文学東海支部第15回研究発表会(2004.6)の発表原稿「植民地台湾文学と日本人作家のジェンダー——真杉静枝と中村地平による先住民表象からの一考察」に加筆・訂正を加えたものである。

※ 旧漢字を新漢字に改め、引用文のルビを略した。